近世の『源氏物語』巻名和歌―冷泉為村を中心に―

山本綏子

はじめに

『源氏物語』の各巻名を題とする和歌（本稿では「『源氏物語』巻名和歌」あるいは「巻名和歌」と称する）は、『源氏物語』成立以降、多くの歌人によって詠まれてきた。

研究の中心はもっぱら中世に成立したものについてであるが、翻刻が備わっている資料を中心に、近世に詠まれたものも取り上げられることがある。

たとえば、宮川葉子氏「徳川大名柳沢吉里と『源氏物語』―「詠源氏巻々倭歌」を中心に―」[1]は、柳沢吉里の『源氏物語』巻名和歌を取り上げ、その成立背景から大名の『源氏物語』受容の様態について述べたものである。

また、『新日本古典文学大系』に翻刻・注釈が備わったことを皮切りに、近年は堀田正敦主催『詠源氏物語和歌』が比較的多く取り上げられるようである。盛田帝子氏「堀田正敦主催「詠源氏物語和歌」をめぐって」[2]は、詠者の顔ぶれから、松平定信の文化圏の様相に言及している。

歌集の成立背景に関するものが多い中、ここで特に注目したいのは、加藤睦氏の論考である。氏は、それぞれの和歌を丁寧に解釈し、『源氏物語』の登場人物を詠んだものとそれ以外とに大別した上で分析をされている。『詠源氏物語和歌』については、[3]

> 正敦主催『源氏物語巻名和歌』は、歌人たちが歌を一首ずつ持ち寄って、皆で『源氏物語』への共感を示そうとした催しと言えるだろう。作中人物の目や心に同化して詠まれた歌が少なく、ほとんどの歌が第三者の立場から詠まれているのも、共同の催しにおける詠歌であったことがあるいは影響しているのかもしれない。

と述べておられる。また、同じ方法によって松平定信の巻名和歌も分析し、次のように述べておられる。[4]

> 定信の源氏物語巻名和歌において何よりも特徴的なのは、光源氏その他の作中人物の心への強い関心と、そこに散見する批判的な姿勢である。

和歌そのものを一首一首丹念に解釈し、それぞれの文献の特徴に言及する加藤氏の論考には学ぶべき点が多くある。

しかし一方で、氏が特徴とされるものが、その文献独自のものなのか、それとも他の文献にも共通していえることなのか、その

点の判断ができ兼ねるようにも見受けられる。一点の文献について丁寧に分析することと同時に、複数の文献をある程度横断的に見て比較することも必要と思われる。

こうした動機から、本稿では、わずか五点の文献ではあるが、複数の近世の『源氏物語』巻名和歌を見比べ、その上で若干の気付きを述べてみたい。

一

本稿で取り上げる文献は、次の五点である。[5]

① 北村季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』（一七〇四〈宝永元〉年成立）

② 冷泉為村『般若心経源氏物語和歌』（一七四四〈寛保四〉年成立）

③ 上田秋成『藤簍冊子』（一八〇二〈享和二〉年序）

④ 松平定信『源氏物語巻々和歌』（一八世紀末〈天明・寛政頃〉成立か）

⑤ 『詠源氏物語和歌』（一八一四〈文化一一〉年成立）

詠者は、①・②が堂上派の歌人、③が国学者、④が武家歌人であり、⑤は定信文化圏の歌人たちによる競詠である。⑤の中心は武家歌人であるが、国学者なども出詠している点が注目されている。また、①・②・④は、石山寺に納められた奉納歌である。成立時期、流派がそれぞれ異なるものを、今回は取り上げることとした。

まず、『源氏物語』のそれぞれの巻の中で、どの場面が詠まれたかという点に注目して五つの文献を見渡してみると、やはり巻の中でも印象的な場面、中心的な事柄が詠まれることが多いことに気付く。

たとえば、『源氏物語』「蓬生」巻では、須磨・明石に流謫していた源氏が京に帰還し、末摘花邸を訪問する。五つの巻名和歌は、いずれもこの場面を詠んでいる。

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

蓬生

あれてだにかはらぬ宿に蓬生のふかき心の哀れしらるる

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

よもぎふ

はる風の花のたよりにとはれけりくる人またぬみ山がくれも

③ 秋成『藤簍冊子』

蓬生

藤なみのかけてまつとはとひてしる露ふる宮の門のしるしに

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

蓬生

よもぎふのもとの心をとふ月にいろなき露もいろをそへつつ

⑤『詠源氏物語和歌』

蓬生　　勝雄 成嶋

打ちはらふ露の光を待ちえしも親のめぐみの蓬生の宿

『源氏物語』「蓬生」巻に見える和歌を踏まえたものが三件。すなわち、①「ふかき心」・④「もとの心」は源氏の「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を」[6]、②「花のたより」は末摘花の「年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか」の表現をそれぞれ摂取したものである。また、①・④・⑤「蓬生」、③「藤」、③・④・⑤「露」も、和歌ではないが、「蓬生」巻に見える表現である。[7]つまり、いずれの歌も『源氏物語』の表現に依拠しつつ、都に戻った源氏が末摘花の邸を再訪問する場面を詠んでいるのである。同様に五者がいずれも同じ場面を選択している例として、「関屋」（源氏と空蟬とが再会する場面）[8]、「初音」（明石の姫君が幼いながらも歌を詠む場面）[9]などがある。

五つの文献で、詠む場面が二つのパターンに分かれることもある。「帚木」の例を挙げる。

①　季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

帚木

逢ふことの有りもあらずも世語りに伝へし名やは消ゆる帚木

②　為村『般若心経源氏物語和歌』

ははき木

むなしきはふせやに消ゆる箒木のあるをありともたのまれぬ世ぞ

③　秋成『藤簍冊子』

箒木

さまざまに定めあらそふ人の上にはては心もさみだるる空

④　定信『源氏物語巻々和歌』

箒木

よひのまの露に雫にかぞへつつあだなる玉のしなやあらそふ

⑤『詠源氏物語和歌』

ははきぎ　　侍従忠精 牧野

その人のありともわかで雨の夜に世のしなじなを語る言の葉

①・②は源氏の空蟬への想いを詠んでおり、両者ともに空蟬の「数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木」の詠を踏まえている。一方、③・④・⑤が詠んだのは、いわゆる「雨夜の品定め」の場面で、「帚木」巻の「この品々をわきまへ定めあらそふ」から表現をとっている。巻の中でも印象的な場面が二つ以上ある場合には、どの場面を選択するかは分かれる。その

他の例としては、たとえば「行幸」があり、冷泉帝の行幸の様子を詠む場合と、玉鬘を巡るもの（源氏の苦悩や源氏と内大臣との確執）を詠む場合とにわかれている。[10]

このように、いずれの巻においても、巻の中でどの場面を詠むかはある程度固定しているように見受けられる。[11]

ここで注目したいのが、他の詠者が共通の場面を詠んでいるにもかかわらず、一者だけ他とは異なる場面を詠む場合である。[12] こうした例は、いずれの資料においても複数見られる。特に、⑤『詠源氏物語和歌』を除く四つの文献では、五四首、あるいは五五首[13]を一人で詠む。いわゆる定番の場面ばかりではなく、時にはそのような場面を避けて、バリエーションをもたせようとするだろうことは、想像に難くない。また、それぞれの歌人で、思い入れの強い場面が、巻の中心的な場面と異なることもあるだろう。

しかし、こうした例の多寡は、文献ごとに異なる。今検討している五点の資料の中では、独自性の強い歌を詠むとされる③秋成が場面の選択においても他とは異なる傾向を示すのではないかと推測されるのであるが、実はこうした例が最も多いのは②為村である。為村のみが、他の四者と異なる場面を詠んでいるものを二例示す。まずは、「朝顔」である。

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

朝顔

置きがたくみるもあやしな朝顔の下紐とけぬ言の葉の露

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

あさがほ

ほのかなるかげも夜ふかきともしびはね覚めさびしき友とこそなれ

③ 秋成『藤簍冊子』

朝貌

あさがほの花田は色をふかむれどうつらでおける庭の白露

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

朝がほ

をく露のあだなる中に咲きぬれどこころことなるあさがほのはな

⑤『詠源氏物語和歌』

朝顔　　司直 成嶋

花は猶さかりと見えて古宮につれなくかかる露の朝顔

①・③・④・⑤は、いずれも『源氏物語』における源氏の詠「見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらん」を踏まえて、朝顔の君に対する源氏の想いを詠んでいる。

一方、②為村が選んだのは、藤壺が源氏の夢枕に立つ場面である。源氏が紫の上に対して、藤壺を含む様々な女性について語った夜、源氏は藤壺を想いながら床に就く。「朝顔」巻には「入りたまひても、宮の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほの

かに見たてまつるを、」とあって、為村歌はこの表現を踏まえている。また、「かげ」は同じ場面の源氏の歌「なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ」、「ね覚めさびしき」も同じく源氏の歌「とけて寝ぬ寝覚めさびしき冬の夜に結ぼほれつる夢のみじかさ」から摂取した表現である。ほのかな灯火のように夢でほんのわずかに見た藤壺の姿でさえも、寝覚めの寂しさの慰めとなることだという、源氏の心境である。

次に掲げるのは、「藤裏葉」である。

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

藤裏葉

隔て置きし宿のかきほもこよひこそ藤のうらばの恨みとけなめ

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

ふぢのうら葉

露にみし花のちぐさの秋くれてまがきのきくも色ぞうつろふ

③ 秋成『藤簍冊子』

藤末葉

大島のなるとならずと汐舟のからきわたりも風を待ちえて

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

藤裏葉

時しあれば雲ゐのかりの折を得てふぢのうらばのうらみをやとく

⑤『詠源氏物語和歌』

藤のうら葉　　正邦　山本忠兵衛

なつ衣たち初めしよりうらなさの心やかけし松の藤なみ

為村以外の四者は、内大臣が自邸の藤の宴に夕霧を招き、雲居雁との仲を許す場面を詠んでいる。①・④の「藤のうらばの」・「恨み」は、「藤裏葉」巻中の「「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、」・「上はつれなくて、恨み解けぬ御仲なれば、」という表現をそれぞれ取り込んでいる。③秋成はここでは『源氏物語』の表現をとっておらず、独自性の強い表現で詠んでいるといえよう。⑤『詠源氏物語和歌』については、「松の藤なみ」が、「藤裏葉」巻の内大臣の歌「紫にかごとはかけむ藤の花まつよりすぎてうれたけれども」による表現である。

いずれも夕霧と内大臣との和解を詠んでいるのに対して、②為村は源氏が准太政天皇に昇進したこと詠む。「花」「秋」「まがき」「きく」といった語は、源氏と太政大臣に昇進した内大臣とが、かつて青海波をともに舞ったことを思い出す場面で交わされる和歌「色まさるまがきの菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふらし」（源氏）、「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る」（太政大臣）を踏まえ、青海波を舞ったときのかつての源氏も野の花々のようにみずみずしく美しかったが、准太政天皇

の地位についた今、一段と深みを増すことだと詠んでいる。

同様の例はほかにも、「紅葉の賀」、「澪標」、「絵合」[14]などがあって、枚挙に暇がない。こうした例が最も少ないのは、④定信と⑤『詠源氏物語和歌』で、今回取り上げた文献に限ってではあるが、江戸の歌人は素材の面では冒険をしない傾向が見える。特に⑤『詠源氏物語和歌』は各歌人が一首ずつ詠むため、ひとりひとりが独自性を打ち出しにくいのであろう。②季吟・③秋成は、④定信・⑤『詠源氏物語和歌』よりはいくらかこうした例は多く見られるが、②為村は四者にくらべると圧倒的に多い。為村は、意外性のある着眼点で巻名和歌を詠んでいるのである。

二

次に、各資料において、巻名またはそれに類する語を詠み込む度合いを見てみよう。『源氏物語』の中でも、巻名になっている語が見える場面には、当然注意が向きやすい。定番の場面を詠むことと、巻名にもなっている語を詠むこととは、数の上で比例するのではないかと予想できるからである。

「若菜 上」の例を掲げる。

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

若菜 上

かぞへとる子の日のけふのわかなにはしばしも歳を忘るべきかな

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

わかな 上

夏ごろもたちよる木々にすずしきはふく夕風に秋やきぬらん

③ 秋成『藤簍冊子』

若菜 上

猶わかきけこそそひぬれ春ののにつむ菜を君が老のはじめに

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

若菜 上

老らくの道にいりても立ちかへる心や春にまたかすむらむ

⑤ 『詠源氏物語和歌』

若菜 上　　忠礼 西田

よそとせはひがかぞへにやとばかりに老も若なの色ぞふりせぬ

①・⑤に「わかな」あるいは「若な」の語が見える。③は「わかき」「菜」と表現している。②・④は、こうした語を詠み込んでいない。

このような例、つまり巻名を詠み込む歌が多いのは、五つの文献においては①季吟・④定信・⑤『詠源氏物語和歌』である。②為村はきわめて少なく、③秋成は中間といったところである。

前節での検討とあわせると、次のことがいえる。

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』
巻名を取り入れることが多く、定番の場面を詠むことも少なくないが、ある程度定番以外の場面も詠んでいる。

② 為村『般若心経源氏物語和歌』
定番の場面を詠むことが少なく、かつ巻名を詠み込むことも少ない。

③ 秋成『藤簍冊子』
定番の場面を詠むことが多いが、巻名を詠み込むことは多くはない。

④ 定信『源氏物語巻々和歌』
定番の場面を詠むことが多く、かつ巻名を詠み込むことも多い。

⑤『詠源氏物語和歌』
定番の場面を詠むことが多く、かつ巻名を詠み込むことも多い。

①季吟は、類型的な素材を取り込みつつも、独自性も見せており、最もバランスがよいように見受けられる。③秋成は、素材については奇をてらうことはしないものの、表現についてはオリジナリティの強い詠み方をしているといえる。④定信・⑤『詠源氏物語和歌』が同じ傾向を示すのは、興味深い。両者ともに、素材や表現では独自性を強くは打ち出していない。

さて、ここで今少し、②為村について考えてみたい。為村の目指した和歌の姿について、久保田啓一氏は次のように述べておられる。[15]

要するにぎくしゃくした表現をとりやすい「新らしき風情」をいかに「優美に読なす」かが大事なのだろう。いうまでもないが、これは「新らしき風情」の必要性を前提とする。新味がなければ意味がない。しかもそれは端正にまとめ上げられなければならない。為村のみならず堂上歌人たちはすべて、中世以来の依拠すべき表現の堆積と、多くの題による本意の規定を前にして、新鮮と典雅という矛盾しがちな両条件を備えた自詠を紡ぎ出さなければならなかった。

為村をはじめとする近世の堂上歌人は、伝統美を重んじつつ新しみをも追求する必要があったのだという。そして氏は、為村について、

実際、為村の和歌を用例で固めつつ読む正統的な方法で注釈しようとする場合、先行の類型に納まらない表現の多さに驚かされることがある。しかもその新奇な言葉が一首の躰を崩さず、むしろ一首の要の位置に無理なくすわる。先ほども述べたが、為村にとって幸運だったのは、砥礪の手本と仰ぐ極めて上質の堂上和歌が前代に量産され、表現の可能性が究極近くまで高められていたことである。同世代の歌人たちがその高度の表現力に追随するのがやっとだったなかで、為村

はそれらを天分の糧として十分に生かし、さらなる表現の追求を目ざして相応の成功をみたのだった。

と述べられる。伝統を遵守しつつ新しみをもたせることは、決して容易ではない。しかし、それを達成できたのが為村という歌人であったと評されている。

久保田氏の指摘は表現についてのものだが、『源氏物語』巻名和歌を見るに、着想についても同じことがいえると思われる。というのは、為村の『般若心経源氏物語和歌』は、形式の上でも特異な文献だからである。今、『石山寺資料叢書』の翻刻によって、仮に「桐壺」の本文を掲げる。

般若心経

きりつぼ

かぎりとてわかるる道のかなしきにいかまほしきはいのちなりけり

な

なきあとの露のひかりにのこしけりわかるる道のながきかたみは　為村

通常、巻名和歌においては、題と自詠とが記されるのみである。しかし為村のものは、すべての和歌について、右に掲げたような形式で記される。

はじめに「般若心経」と置かれるのは、この資料の、次のような成立事情による。[16]

冷泉為村が寛保四年（一七四四）の春に源氏物語一部書写の業を遂げ、報恩のため般若心経を五十四巻書写し、その各巻末に源氏物語の巻々に寄せて和歌を二首ずつ書き添えて成立したもの。それを宝暦二年（一七五二）に石山寺法輪院に奉納したと記されている。

題に続いて、『源氏物語』から和歌を一首引用する（「かぎりとて……」）。ちなみに、為村は「雲隠」を詠んでいない。この、『源氏物語』から必ず一首を引用するという形式をとったがために、本文が存在しない「雲隠」を詠むことができなかったのである。

次の「な」の文字については、説明を要する。為村は、五四首の和歌をそれぞれ「な」「む」「く」「は」「む」「せ」「を」「む」「ほ」「さ」「つ」の字を冒頭に置いて順に詠んでいる。「桐壺」の「なきあとの……」に続き、「帚木」が「むなしきはふせやに消ゆる箒木のあるをありともたのまれぬ世ぞ」、「空蟬」が「くれそむる露の木がくれたちよれば月かげすずし夕だちのあと」といった具合である。

つまり、為村は、『源氏物語』中の和歌を必ず踏まえる、「なむくはむせをむほさつ」の順に歌の頭の字を固定するという、独自の条件を複数設けた上で巻名和歌を詠んでいるのである。こうした制限がある中で、優れた歌を詠もうとすることは、きわめて難しいだろうと想像される。しかし為村は、敢えてこうした形式を自らに課したのである。

定番ではない場面を詠むこと、巻名をあまり詠み込まないことも、このことと関わっているのではないだろうか。まず考えられるのは、かなりの制限をかけた中で和歌を詠んだために、結果的に巻名を詠むことが少なくなり、かつ珍しい場面が多くなったのではないかということである。しかし、珍しい場面を詠みつつ、かつ巻名も詠み込んだ和歌も少なからず見える。為村以外の例であるが、

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

須磨

なく千鳥聞くだにすまのうら悲し翅ならべし友したふなる

などが、それにあたる。季吟以外の四者が須磨での源氏の感懐を詠んでいるのに対して、この季吟詠は頭中将による源氏訪問を詠んでいる。それでいながら、「すま」の語を含んでもいる。[17]

また、次のような例もある。

③ 秋成『藤簍冊子』

をとめ

をとめ等がつれまふ衣の音さえて夜や更けぬらん庭火しめれる

秋成以外は、夕霧と雲居雁との恋にまつわる内容を詠んでいる。[18]一方、秋成が詠んだのは老いについての源氏の心境であるが、「をとめ」という語は用いている。

このことを踏まえると、為村の巻名和歌に、巻名やそれに類する語を詠み込んだ和歌が極端に少ないのは、そういった表現を意図的に避けた結果なのではないかと考えられる。敢えて巻名を詠み込まないことも、為村の意図的な作詠方法だった可能性があるのではないか。例外はあるにしても、巻名を詠み込むと、自然と巻の中心的な場面を詠むことが多くはなる。そこで為村は、意図して巻名を詠み込むことを避け、そのことによって、ありきたりな発想から脱しようとしたのではないだろうか。

先に先行論を引用して確認したように、為村は伝統的な表現も踏まえつつ、新しい表現をも積極的に取り入れる歌人であった。ひとりの人間が次々と新しい表現で和歌を詠むことは、きわめて困難である。しかし為村は、伝統の中に常に新しみを吹き込み続けた。そうした新しい表現を獲得するためには、為村も様々な工夫をしたはずである。巻名和歌に関しては、その工夫の一つとして、形式を特殊なものにして、敢えて条件を設けた中で新しい発想を生み出すということがあったと思われる。『源氏物語』巻名和歌からは、歌人のそうした工夫の、具体的な痕跡をうかがうことができるのである。

おわりに

以上、五点の『源氏物語』巻名和歌について、場面の選択、表

現（巻名を詠み込むか否か）の観点から、それぞれの資料の特徴を検討した。特に冷泉為村については、『源氏物語』中の和歌を一首踏まえる、冒頭の字を固定する、巻名を極力詠み込まないという、複数の条件のもと、きわめて不自由な状況で和歌を詠んでいる点に注目し、その結果為村は他の歌人とは異なる発想を獲得し得たのではないかという可能性を指摘した。

もちろん、わずか五点の資料を見たのみでは、いえることは限られている。今回の検討では、今後の見通しをわずかに得たに過ぎない。さらに比較対象とする文献の数を増やして検討する必要がある。

また、近世のみならず中世の巻名和歌とくらべたとき、はじめて見えてくるものもあるだろう。長い時をかけて、多くの歌人たちが、同じ題材で詠んだ和歌である。時代の特徴、歌人の特徴などを考えてゆく上での、様々な材料を与えてくれるものと期待される。

注

1　『近世文芸』五五号（一九九二年二月）。

2　『近世雅文壇の研究―光格天皇と賀茂季鷹を中心に―』（汲古書院・二〇一三年一〇月）所収。

3　「近世和歌と『源氏物語』―源氏物語巻名和歌の方法―」（『源氏物語と江戸文化―可視化される雅俗―』〈森話社・二〇〇八年五月〉所収）。

4　「松平定信の源氏物語巻名和歌を読む」（『源氏物語と和歌』〈青簡社・二〇〇八年一二月〉所収）。

5　参照、引用したテキストは、次の通りである。ただし、引用に際しては、濁点を補い、漢字・踊り字等を現代通行のものに改めた。また、適宜送り仮名を補った。なお、影印等を参照して翻刻を改めた箇所がある。

①『石山寺資料叢書　文学篇　第二』（法藏館）

②『石山寺資料叢書　文学篇　第二』（法藏館）

③　新日本古典文学大系『近世歌文集　下』（岩波書店）

④『石山寺資料叢書　文学篇　第二』（法藏館）

⑤　新日本古典文学大系『近世歌文集　上』（岩波書店）

6　以下、『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』による。

7　「浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。」・「大きなる松に藤の咲きかかりて」・「惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ入らせたまふべき」と聞こゆれば、」など。

8　①　季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

関屋

たまさかにあひ逢坂の関山ももる人あればかひやなからん

②　為村『般若心経源氏物語和歌』

せきや

むつまじき契りはしらぬあふ坂やゆきあふみちとよそにききても

③ 秋成『藤簍冊子』

関屋

心にはゆるせし関にあふ坂の山した雫袖ぬらしけり

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

関屋

うつせみのもぬけのきぬのみのうさに心ばかりはあふさかの関

⑤『詠源氏物語和歌』

関屋　飛騨守忠英　中川

はからずもけふこそめぐり逢坂や関のこかげに車とどめて

9

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

はつね

はつ春の初ねおしまずなく鳥を待ちえてけふやしばし慰む

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

はつね

なれもけふ待ちえしのべの初ねとやまつにひかれて鶯のなく

③ 秋成『藤簍冊子』

初音

雪分けてけさ谷出でし鶯の春の方には声もこほらず

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

初音

花鳥の色ものどけきよの春もはや飛びゆかむ初音とぞみる

⑤『詠源氏物語和歌』

初音　維祺　秋山内記

鶯の初音のどけきはるにけふ御前の山の小松をぞひく

10

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

行幸

明らけき君がみゆきの光りには大原山の神もめでけん

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

みゆき

をのがどちめかりしほくむ海人の子が沖つ玉もをかづくひまなさ

③ 秋成『藤簍冊子』

行幸

小塩山みゆきのためし野にみちて打ちちる雪に御鷹よぶ声

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

みゆき

うちきらしふりしみゆきに音無の滝のしらいとみだれそめつつ

⑤『詠源氏物語和歌』

行幸　躬弦　安田公庵

すり衣袖に打ちちる行幸こそ神代もきかぬ大はらの山

①・③・⑤は行幸の様子、②・④は玉鬘にまつわる事柄を詠んでいる。

11　詠まれる場面が多岐にわたるものは少ないが、たとえば「鈴虫」などはその例である。

①　季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

鈴虫

すずむしの声にみだれてあぢきなくふり捨てしよに猶かへれとや

②　為村『般若心経源氏物語和歌』

すずむし

むさしののかぎりやいづこ秋の夜の月に尾花の末ぞしられぬ

③　秋成『藤簍冊子』

鈴虫

それにとてつげし心を笛竹のふしたがへりとなげきてぞよる

④　定信『源氏物語巻々和歌』

鈴虫

すずむしのひびきもひとつ法の声にこころの外の露かかるらむ

⑤『詠源氏物語和歌』

（鈴虫）　入道逸阿　小笠原孫兵衛

つくりなす野べにはなちしむしの音のさだめをしつつ月をみる哉

①・④は女三の宮の出家、②は冷泉院の実父（源氏）への思い、③は源氏・柏木・薫と源氏・冷泉院の父子関係、⑤は八月十五夜の鈴虫の宴を詠んでいる。

なお、⑤では、「鈴虫」巻については、林衡の漢詩と逸阿の和歌とが併記されている。題は、林衡の漢詩にのみ付されている。詠まれた場面は、漢詩と和歌とは同じ。

12　『源氏物語』登場人物のうちで誰の心境を詠んだものか、和歌の重点がどこに置かれているかといった部分での若干の差異は、今回は問題にしない。詠まれた場面が同じであれば、同一場面を詠んだものとして扱う。明らかに他と異なる場面が詠まれたもののみ、異なる場面を詠んだものとして検討する。

13　物語本文のない「雲隠」巻についても詠まれる場合がある。

14　「紅葉の賀」

①　季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

紅葉賀

舞人の紅葉のかざしさしかえて顔の匂ひをそふる白菊

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

もみぢの賀

をきそへば猶さきそひてなでしこの花に色わくませの朝露

③ 秋成『藤簍冊子』

紅葉賀

もみぢ葉の光をけふは照りそへて千秋と君をいはふべらなり

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

紅葉賀

心ならで立ちまふそでは紅ぢばのうつろふ秋の色としりきや

⑤『詠源氏物語和歌』

紅葉賀　周防守高備 京極

青海の波の立ちゐにかざせるも入る日をいろの紅葉々のかげ

①・③・④・⑤は舞を舞う源氏の美しさ、②のみ若宮（後の冷泉帝）の誕生を詠んでいる。

「澪標」

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

水尾尽

姫松の陰頼む身は数ならぬ歎きを何にすみよしの岸

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

みをつくし

くる宵をかけてたのむもいかならむわかれをおしむそでの朝露

③ 秋成『藤簍冊子』

澪標

忘らるる身はかつしれど墨江の浜によりこしかひは有りけり

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

標樗

いつとてもぬれずやはあるみをつくし深き契のしるしばかりに

⑤『詠源氏物語和歌』

標澪　若狭守忠通 水野

難波なるえにしも深きみをつくししるべたがはで逢ふよしもがな

①・③・④・⑤は明石の君の物思い、②のみ六条御息所の死を詠んでいる。

「絵合」

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

絵合

くらべみん絵嶋の磯も遠ければ心にさはぐすまの浦波

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

絵あはせ

せきいるるこころの内をさぞとしもしらぬ涙の滝のみなかみ

③ 秋成『藤簍冊子』

絵合

須まの浦にすみははてじと絵にうつしことにかこちてけふを待ちけり

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

絵合

はかなさの心くらべのうつし絵にそのよの人のけしきをぞみる

⑤『詠源氏物語和歌』

絵合　河内守昌始　朝比奈

かきつめて心の花のうつしゑに色をあらそふ春の手すさみ

①・③・④・⑤は絵合の催し、②のみ斎宮に対する朱雀院の想いを詠んでいる。

15 『近世冷泉派歌壇の研究』（翰林書房・二〇〇三年二月）。

16 『石山寺資料叢書　文学篇　第二』解説。

17

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

須磨

名にたてる月のとだへはすまの浪うらのみるめも秋にそひぬる

③ 秋成『藤簍冊子』

須磨

心から身は山がつにやつせども猶こりずまのうらなげきして

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

須磨

おぼろよの春の都のうきや思ふすまのうらわの月のみるめに

⑤『詠源氏物語和歌』

須磨　日向守利和　巨勢

須磨の浦にさすらひてこそあまのかるうきめをさへも思ひしりぬれ

18

① 季吟『石山寺奉納詠源氏物語巻々和歌』

乙女

遠ざかる人を雲ゐにこふるとて天津乙女をよそへてぞみる

② 為村『般若心経源氏物語和歌』

をとめ

さぞとしもつれなく人は思はずや身のうきほどのつもる
恨みを

④ 定信『源氏物語巻々和歌』

乙女

へだてこし雲の絶えまのなぐさめにをとめの袖をひきや
とどめし

⑤『詠源氏物語和歌』

乙女　　豊後守頼常 肥田

秋の夜の哀れをそへて鳴きわたる雲井の雁に荻の上風

〔付記〕

本稿は、藤女子大学日本語・日本文学会二〇一六年度研究発表会（二〇一六年六月二五日・於 藤女子大学）での口頭発表「近世の『源氏物語』和歌」に基づくものである。発表の席上、また発表後にご教示を賜りました諸氏に感謝申し上げます。

（やまもと　すいこ／本学教授）